

共通
Q&A

歴代編集者6名に「Q1. 思い入れのある、またはお気に入りの記事」「Q2. 編集担当をしていた中で、もっともピンチだと
思った瞬間」「Q3. 今後の博物館における刊行物の役割や意義とは？」の3問をお聞きました。

たぐち きみのり 田口 公則 (学芸員)	編集担当 期間 通巻17号(1999年6月発行)～28号(2002年3月発行) 通巻83号(2016年6月発行)～86号(2017年3月発行)
--------------------------------	--

私のバックグラウンドは地質学です。地質図づくり(地表踏査)から貝化石の仕事に入りました。地図へのプロット作業、いくなれば対象物の定位置に関心があります。資料・史料を残すという行為もその延長です。自然科学のとびらは、記事を定位するフィールドと言えそうです。

A1. スゴイと思った記事は、通巻84号の表紙を飾った「ムネアカハラビロカマキリ」です。学芸員の荻部さんから投稿の話を受けたとき、その写真を一目見て即採用と決めたとです。外来種のスクープだったことと、写真があまりにも大迫力、まるで漫画でいうところの「集中線」が入っているようなインパクトを受けたからです(図)。

表紙効果も手伝ってか、掲載後には地域のカメラキリ情報が多数寄せられたそうです。タイムリーな情報を載せた自然科学のとびらの面目躍如といったところでしょ。

A2. 担当時、緩やかな原稿募集により原稿不足となり、その穴を自分で埋めることも度々でした。編集をしながら内容を自分で調整できることは利点なのですが、締切前はピンチとなります。通巻85号に企画展「石展2」の関連記事を載せた時、表紙には企画展ポスターを撮影した際の現場写真が使えろと考えていました。いざ写真を割り付けてみるとどういわけかぱっとしません。巨石の大きさを伝えたいのに、大きさのわかるものが写り込んでいないのです。でも、格好いい写真が欲しい気持ちとなり、急いで現場に向かい再撮影。自分がスケールとなり写り込むことにしました。セルフタイマー撮影で何度も走り、すっかり息が上がってしまいました。手を抜かず再撮影したことで巨石の大きさがわかる写真となりました。

A3. 自然科学のとびらの誌面には、ある程度自由な形式での記事が載ります。



図. 集中線の効果による大迫力の表紙写真のイメージ。

科学論文のような縛りはないからです。この緩やかさのおかげで、自然科学のとびらには執筆者の人となりや心意気等が表れてきている文章が多いと思います。このことは読者にとって、誌面を通して博物館の学芸員と通じ合う機会になっているものと期待します。これは言わば「学芸員との対話」の提供です。刊行物の多様な展開の一つに対話メディアの役がありそうです。

かるべ はるき 荻部 治紀 (学芸員)	編集担当 期間 通巻29号(2002年6月発行)～33号(2003年6月発行)
-------------------------------	---

昆虫担当学芸員の荻部です。2002年の通巻29号から2003年の通巻33号まで1年間編集を担当しました。担当期間が短かったからなのか、実はこの依頼を受けるまで、自分がかつて編集担当をやっていたことを完全に忘れていました。しかし、もう20年近く前になるのですね。東日本大震災、今年の新型コロナと、社会を揺るがす自然災害を含む激動の時代に入っていくとは思ってもいかなかったです。

A1. この企画を頂いて、改めて担当した号を読み返しました。読んでみて印象に残ったのは、逝去された先輩学芸員たちの記事。元気で活躍されていた頃を思い出します。ちなみに、オッサンだったはずの彼らの当時の年齢を自分はもう超えているのを知ると、時の流れの速さに驚かされます。また、依頼した原稿の編集者と執筆者の関係だった川上和人さん(当時は全く面識がなかった。今をときめくバード川上)と、

後年、小笠原の調査で深く関わることになる、想像もしなかったですね。やはりこの世界は狭い。若かった自分も今よりは真面目に生きていた記憶があるので、外来種問題など、世間に一生懸命課題を伝えようとしている様子が伝わるのも微笑ましいです。

A2. 編集ソフトを使ったことがなかったはずなので、初めての割付作業をした時は苦労したと思いますが、終わったことは楽しかった記憶になってしまうので、特にピンチだったことの影響は残ってないです。

A3. 今後、本誌に限らず、印刷物の発行形態は、紙から電子媒体へ急速に変化していくので、学芸員を含む博物館と読者の皆さんをつなぐ役割は変わらないと思います。改めて読み返すと情報としては古くなった内容もあるにせよ、内容も多岐にわたり、面白い雑誌だなと自画自賛。皆さんもこの機会にぜひ100号読み返して

みては？
今後多様な話題を提供できるよう、我々学芸員も研鑽を続けます。電子化が進んでいけば、予算的な制限もなくなっていくので、ページ数も多様な号が編集できるかも？



図. 通巻30号(2002年9月)の表紙。